

“To be call'd whore”: Domestic Tragedy における Slandered Heroine

吉 田 季実子

0. 序

William Shakespeare の *Othello* と Elizabeth Cary の *The Tragedy of Mariam, Fair Queen of Jewry* はしばしば並行的に論じられる。創作年代が 1604 年と 1613 年前後で、Cary が Shakespeare の作品に何らかの影響を受けていただろうという指摘もなされており、この 2 編を同時に収録するに当たり、Clare Carroll は共通点として妻の親族が夫を見下しているという点、夫が騙されて妻の貞操を疑うという点、貞潔な妻が不貞の疑いをかけられて夫に殺害される点をあげており、異人種間結婚の招いた悲劇としての観点を提起している (Carroll xvii)。確かに、この 2 作品において、夫が妻に不貞の疑いを抱いて、嫉妬から妻を殺害してしまうというメインプロットは一致しており、Ina Habermann はこの 2 作品を夫が妻を公然と侮辱する劇として共通しているとの観点から同時に論じている¹が、その一方で、各々のサブプロットやメインプロットのディテールに焦点をおいた場合、登場人物に決定的な差異があらわれているといえるのではないだろうか。特に女性キャラクターに関しては、各々の作品内で意図的な色分けが行われているのに比して、作品間ではむしろ類似点が見て取れるところもおおく、それゆえにこの 2 作品を同時に語ることができるといっても過言ではないだろう。以下、本稿ではこの 2 つの Domestic Tragedy における女性キャラクターの位置づけの検証を中心に、2 作品にあらわれる社会的背景や作者のスタンスを検討したいと思う。

1. *Othello* における Maid、Wife、そして Whore

a. 女性キャラクターとその位置

Othello に登場する女性キャラクター、Desdemona、Emilia、Bianca は、Maid、Wife、Whore の三位相を代表しているように思えるが、実際はそれぞれがその中で横断的な位置を占めている。(なお、当時の女性の区分けとして Maid、Wife、Widow の 3 区分が一般的にもちいられているが、本稿では当時それらの埒外に位置するとされていた Whore を考慮することで、女性の身分という大前提自体を問い直す。) この 3 層を明らかに横断しているのは *Othello* の妻 Desdemona である。Desdemona は当初、Brabantio の娘 =Maid として登場し、*Othello* と駆け落ちすることで Wife の位置を得るも、夫の *Othello* からは Whore であるとなじられて最終的には殺害される。ここで着目すべきは Desdemona という女性主体自身にはアイデンティティーの自覚的な転換は Maid から Wife への時にしか起こっておらず、その際にむしろ周囲は彼女を Maid の位置に留めておこうとしているが、逆に Whore と称されるときには男性によって彼女は Whore として封じ込められるのである。自らを Wife として主張する Desdemona のセリフは自身の妻としての立場、義務、権利を主張している。

DESDEMONA. I do perceive here a divided duty.

To you I am bound foe life and education;

My life and education both do learn me

How to respect you. You are the lord of duty;
I am hitherto your daughter. But here's my husband,
And so much duty as my mother showed
To you, preferring you before your father,
So much I challenge that I may profess
Due to the Moor my lord. (1.3.18 3 -90)

DESDEMONA. That I did love the Moor to live with him,
My downright violence and scorn of fortunes
May trumpet to the world. My heart's subdued
Even to the very quality of my lord:
[...].
So that, dear lords, if I be left behind
A moth of peace, and he go to the war,
The rites for why I love him are bereft me, (1.3.246-9, 253-5)

しかしこの言動が後に Iago によって彼女の Whore である証しとして用いられることになる。Desdemona は父に母が従ったのと同様に自分は Othello を愛するべきであり、また自分は父を敬う義務と夫に従う義務の二つに引き裂かれていると述べるが、後に Iago は父親に背いた女なのだから夫にも背くはずであると、Desdemona の“divided duty”を利用する²。すなわち、自らの社会的地位を男性によらずに自発的に獲得し、主張しようとする女性は Whore の烙印を押され、その位置に封じられてしまう。Desdemona の場合は、妻としての権利とともに義務も主張しているが、その際に、娘としての父親への従順という義務を放棄している。そしてその結果、夫への従順も疑われて貞操を守らないのではないかという疑惑をもたれてしまうのである。この時に彼女は自ら獲得した Wife の地位から、Iago、そして Othello によって Whore の地位へと追いやられるのであり、女性のステータスの決定権は女性ではなく男性にあるのだという事実を突きつけられることになる。夫によって Whore であると断定されたあとの Desdemona は失地回復しようと奮闘することはないのだが、死に先立って新婚初夜のシーツを用意するようにと Emilia に命ずる³。これはかつて主張した Maid から Wife への転換点の再現であって、死に臨んで再び自らのアイデンティティーにおけるイニシアチブを回復しようという内発的な運動であり、現に彼女の横たわる姿を目にした Othello のフェティッシュな賛美には不貞を犯したと思われる自身の妻の描写というよりもむしろ偶像崇拝的なものにじみ出ている⁴。この時に Desdemona は再び Maid としての位置に近づいているともいえる。つまり Desdemona は自らの意思によって Maid から Wife へと変容を遂げるも、男性によって Whore の位置に追いやられ、最終的には自らの内在的な願望によって男性によって Maid として称賛されるという横断的な立場にある女性であり、Maid、Wife、Whore の 3 層を通過しているヒロインであるといえるのではないだろうか。

それに対して、彼女の侍女である Emilia は Desdemona の侍女であるという社会的地位および、Iago の妻であるという位置を最初から占めた上で登場する。Emilia にあって Desdemona にないものは自らのおかれる立場に対する順応性と諦念である。それが顕著にあらわれているのは 4 幕 3 場のいわゆる「柳の歌」の場面であり、Emilia は Desdemona に対し、独自の夫への忠誠を示している。

EMILIA. The world's a huge thing. It is a great price
For a small vice.

DESDEMONA. Good truth, I think thou wouldst not.

EMILIA. By my troth, I think I should, and undo't when I had
done. Marry, I would not do such a thing for a joint ring,
nor for measures of lawn, nor for gowns, petticoats, nor
caps, nor any petty exhibition. But for all the whole
world! Uds pity, who would not make her husband a
cuckold to make him a monarch? I should venture purgatory for't.

DESDEMONA. Beshrew me if I would do such a wrong
For the whole world.

EMILIA. Why, the wrong is but a wrong i' the world, and having
the world for your labor, 'tis a wrong in your own world, and
you might quickly make it right. (4.3.67-81)

Emilia 自身が、夫である Iago に Othello との不義を疑われており、その時点で Emilia もまた Whore とみなされている。しかし、上のセリフの中で、Emilia は Whore と称されることも承知のうえで、さらに夫に尽くす方法を述べており、その点では、男性によって制限される自らの立場を自覚した上で、その中で最大限に自己を発揮しようとしている。つまり、Emilia は一見、Wife という立場、さらには Whore と呼ばれることにも納得しているかのように見える。しかし、Emilia の地位は男性との関連性においてのみ名づけられる上記 2 種にとどまらず、Desdemona との主従関係という女性同士での契約関係によっても規定されており、Othello による Desdemona 殺害の後に、Emilia はむしろこの第 3 の立場に忠実であるといつてよい。ハンカチの件においては、理由を問いたださずに夫 Iago の悪巧みに加担してしまうが、5 幕の告発の場面では、非道な行いを行った夫に対して反抗することで、妻の夫への盲従を放棄する。妻は夫に従うべきであるが、仮に夫が正しくないと知った時、妻はその義務を放棄することが許されるというのは、当時のプロテスタントの教義でも一部認められており、その点、Emilia の行動にはなんら問題はないわけであるが、Emilia は Iago になる。この場合も、先の Desdemona 同様に、男性によって規定される地位を捨てて、自ら規定する身分を得ようという行動にでた女性に対する男性からの抑圧と考えることができる。

最後に、第 3 の女性キャラクターとして、職業としての Whore である Bianca の存在がある。しかしこの Bianca の位置を一概に規定するのは難しい。冒頭では Cassio の愛人と表記されているが、おそらくベネチアの娼婦であるにもかかわらず、突如キプロスに現れるも、Cassio との愛人関係は長いもののよう描かれており、そして実際に登場はしないが 1 幕 1 場で言及される Cassio の妻とも同一視することが可能である。また、Neill によれば、Bianca は材源で Capo にハンカチの刺繍の模様を写し取るようにいわれた召使いと、彼と関係があった高級娼婦との二人の人物を融合させた人物であるという (Neill 29)。Bianca において特徴的なのは、先に述べた 2 女性とはことなり、同性すなわち Emilia から“strumpet (5.1.119)”と誇られていることである。それに対して Bianca は Cassio に対する誠実さは人妻としての Emilia に等しいと主張して抗弁するが、この時点での Emilia の視点は世間の規範に迎合しているというより、むしろ Iago の視点と同一化している。Bianca は Cassio との関係性においても特殊であり、4 幕 1 場にあるように、Cassio は Bianca の前では彼女に従う風を装っているが、他の男性の前では Bianca は侮蔑の対象である。このような態度が Cassio 自身、Iago をして男らしくない男と言わしめるのであるが、同時にそのような状況の中に身をおいているのは Bianca が Whore という社会規範からの逸脱者であるからに他ならない。したがって、Bianca の場合は男性、および周囲から Whore という位置におかれているが、その位置を規定する約定の中で構成される Cassio との関係性においては自己を主張することに成功している。その主張を破綻させるのはその男女間の約定の周辺に位置する、同性＝女性である Emilia からの中傷であり、Bianca はむしろ

己の地位を自身に有利に働かせる能力を持つが、その地位は男性による規定に依存しているといえる。

以上、述べたように、*Othello* における 3 人の女性キャラクターの位置づけは、男性によって規定された、Maid、Wife、Whore という枠にはまっている。そして女性が能動的にその身分規範を超越しようとした時には、懲罰が下されるのであるが、その一方でその身分の枠内にのみ留まっていればある程度までの自由は保障されるのである。したがって危険を冒してまで身分の枠を乗り越えようとする女性の逸脱は男性社会の秩序の転覆者として抑圧されるが、当初から周辺にいる人物はそれほどの危険を内包しない。危険視されるのは、枠を乗り越えようとする女性の行動なのである。

b. 女性キャラクターとその相関

先に述べたように、*Othello* では女性キャラクターに関しては男性との関係だけでなく、お互いの関係性も描かれている。Desdemona と Emilia は主従関係にあり、Bianca と Emilia は対等であるか否かを言い争う。また、実際には一人の男性に誠実であったという点で Desdemona と Bianca は鏡像関係にあるとも指摘されており、Iago や Othello の妄想を通してのみ、彼女達は同じ男性に共有されていると記述される。また、結局 Whore と称される点から、女性を Whore と呼ぶ男性の視点によれば彼女達は等価であるといっていよい。このような位置関係だけでなく、3 人の女性には相互の関係性が存在している。Gayle Greene が述べているように、*Othello* の作品中では男性性は女性との相対的關係の中で構成されており、したがって、女性の置かれた位置が男性の評価を左右している (Greene 50)。以下女性同士の相対関係はどのように構築されており、どのような重要性を持っているかを考察する。

Greene は、2 幕の Cassio の分類に従えば、女性は Desdemona タイプと Bianca タイプに分かれるが、*Othello* の視点からでは女性はすべからく Whore であると述べている (Greene 51)。Bianca が他の 2 女性からはっきりと差別化されている点は、彼女が職業的な娼婦であることによるものであるが、逆説的には結婚して夫の庇護下に入ることを必要とせず、独自に経済活動を行っている自立した存在であるとも言える。また、彼女が特徴的なのは同性からも差別されている点であり、一見、残りの二人の女性とは切り離された存在であるかのように思われる。しかし、Bianca と Desdemona はむしろ鏡像関係にあるということが可能であり、それは Cassio が Bianca について語っている表情が、Desdemona の話をしている場面として *Othello* に誤解される場面⁷に顕著である (Greene 55)。また、ともに Whore として扱われる中で誠実さを主張している点などの類似から、Bianca の存在は、男性の視点から Desdemona は潜在的な Whore の要素をもっているという可能性を示唆する役割を持っているといえるだろう。

実際には接点を持たない Desdemona と Bianca をつなぐのが Emilia である。先に述べたように、Emilia は限定された条件化での whoredom を肯定しており、whoredom を完全に拒絶する Desdemona と、それを生業とする Bianca との中間的立場に立っている。Iago からは *Othello* のみならず Cassio との姦通すら疑われているが、Cassio、*Othello* と関係を持つという意味においてはまさに残りの二人の女性の中間にあることになる。また、最終的には夫を糾弾するという点において、いかなる時にも男性には忠実である Desdemona や、Cassio にそむくことのない Bianca とはことなる立場にある。

しかし、Emilia が際立っているのは女主人である Desdemona との関係であろう。キプロスに向かう船中の会話や、柳の歌の場前後では、Emilia は夫である Iago よりもむしろ Desdemona に対して忠誠をつくし、時として夫にたいし反抗的な姿勢をみせるのであり、それは Desdemona の殺害後の糾弾の場面において顕著である。また、最後には Desdemona とほとんど時を同じくして殺害されるのであり、運命とともにする相手として夫よりも Desdemona を選んだかのようにも受け取られる。一方、Desdemona が夫との関係の悪化について語る相手は Emilia に限られており、自身の内的な弱さを吐露する相手として *Othello* よりも身近にあるように描かれている。Carol Thomas Neely は Emilia を評して、Desdemona と Bianca の中間の視点をバランスよく持つ女性であり、また男性と女性の中間地帯にも位置していると述べている (Neely

219)。確かに Emilia は立場では上記の二人の間であり、Bianca をののしる場面においては男性的な視野をもっているが、その柔軟性が、夫よりも女主人を重んじるという選択を可能にしているといえる。また、それは先述したように 4 幕 3 場の Desdemona との間答にあるように、自己の判断基準にしたがって社会規範を解釈しなおす能力でもあり、Emilia という人物のもつフレキシブルな視点が、Emilia の視点を時に男性のもつ社会規範に近づけ、またそこから離れて Desdemona との男女間以上に強い結びつきを構成しているといえるのではないだろうか。

以上述べたように、Othello に登場する 3 人の女性キャラクターは、男性キャラクターの視点を借りれば同一視することも可能であるが、互いの位置を際立たせる鏡像、あるいは相互干渉の対象として機能している。そしてその各々の関係性を成立させているのは社会規範の存在であり、またそれを脱構築しようとする女性の内的な力であるといえる。しかし、この戯曲全体ではどのキャラクターのもつ力も陰謀のプロットを主導する Iago には及ばない。女性を Whore として侮蔑するのは主に Iago であり、また Cassio の任官問題、ならびに Othello と Desdemona の異人種間結婚を破綻させようとする点において Iago は「動機なき悪意」というよりもむしろ旧弊な秩序の保持者的役割を果たそうとしているようにも考えられる。したがって Iago のミソジニスト的発想の下では女性は抑圧され、規範からの逸脱者は処罰の対象になる。つまり、劇中のジェンダー規範は Iago によって定められているも同然であり、彼以上にはかりごとをめぐらし、プロットをリードしようとする女性は存在し得ないのである。Iago の果たす役割については演出家的な能力を持っているという指摘がなされてきたが⁸、確かにそのプロットの中でのみ女性キャラクターの立場が規定されているといつてよい。先に述べたように、規範を自在に解釈するという Iago に類似した能力をもつ妻 Emilia によって陰謀が曝露された時にプロットも破綻するのであり、その瞬間までは女性キャラクターたちはミソジニー的視点によって構築された規範から外には出ることができないのである。したがって、たとえ相互に関係性を構築し、またある程度の独自性を獲得しているとはいえ、彼女らは男性の抑圧下でのみ生存を許されているのにすぎないということがいえるのではないだろうか。

2. The Tragedy of Mariam における Wife、Villaine、Slave Woman

Elizabeth Cary の *The Tragedy of Mariam* はイギリス初的女性作家の手による戯曲と言われている。作者の Cary はフォークランド副総督の妻であり、その生涯の詳細は後に尼僧になった娘の一人によって伝記に記されている。この戯曲のヒロイン Mariam は、ユダヤの正統の王朝の王女であり、王位篡奪者の Herod の妻で、夫 Herod の出征中に夫が死んだ場合は殉死させられるという命令が下されているのを知り、夫への不信任感をあらわにする。そのため、彼女は無事に帰国した夫を歓待せず、前から不仲だった Herod の妹 Salome の讒言もあって不義をうたがわれ、嫉妬した夫に処刑される。Othello と同様に嫉妬に狂った夫が不義の疑いで妻を殺害する筋ではあるが、決定的な差違としては、登場する女性の相互の関係性があげられる。第一に夫の嫉妬を掻き立てて妻の殺害を教唆する Iago の役回りがヒロインの義妹である Salome にふられている。本章では、*The Tragedy of Mariam* の女性キャラクターおよび相互の関係について Othello と比較しつつ分析したいと思う。

a. 各キャラクターの位置づけ

先に述べたように、Othello では 3 人の女性キャラクターの間にはいわば友好的な相関関係が生じており、またそれぞれが男性社会の下で規定された身分の中に閉じ込められており脱却できずにいるジレンマを抱えている。また、それぞれのおかれていた立場が対称的であり、鏡像関係を構築しているが、*The Tragedy of Mariam* で浮き彫りになっているのは女性のもつ相互の悪意、そして旧弊な女性の身分規定への反発である。

ヒロインの *Mariam* は現在 Herod の妻であるにもかかわらず、もともとの自分の身分へのこだわりが強いため、夫を親族の敵として意識し続けている。これは、妻は夫に従うべきであるという規範への反発とあってよい。また、夫の前妻の Doris や夫の妹 Salome に対する態度は傲慢であり、欠点のないヒロインとして表象される *Desdemona* よりも悪意のある存在として描かれている。特に夫への不服従については、自分の信念を貫くために夫にはむかうことを是としており、これは *Othello* における *Desdemona* 殺害後の Emilia にも通じるものがある。しかし、その一方で *Mariam* は夫から非難され、殺される妻であり、最初からすでに Herod の妻として登場するものの、彼女自身の母 *Alexsandra* によって、妻としてよりもむしろ、王女、Maid としての地位を再三意識させられるという点は、*Desdemona* との類似点であり、やはり Wife、Maid、そして Whore を横断しているといつてよい。また、Herod が死亡したという流言の際には一時的ではあるが自らを Widow として意識している。最も先の処刑命令から、彼女が Widow という位置に留まることは不可能になっており、このことは女性の地位の自己規定は不可能であり、すべては男性によって管理されていることを浮き彫りにするものである。また、*Mariam* は *Desdemona* と比較した場合に、Wife であることへのこだわりは少ないが、一方で生まれもった身分への言及は Maid への執着であり、処刑後の殉教者的描写の中でセクシャリティを排除して語られることは斬首刑による婚姻の解消、すなわち Maid への回帰ともとることができる。夫への反抗を性的逸脱の徴として罰せられた結果、*Mariam* は新たな身分への移行をはたすことになる。一見自立した主張をもつように描かれている *Mariam* は強固な男性権力によって身体的に抑圧を受けているといえる。

The Tragedy of Mariam では Herod の再婚、および Salome の離婚というように *Othello* よりも複雑化した夫婦関係が設定されているため、女性の置かれている状態を一概には言い表せないが、その中でも特殊なのが Salome である。Salome も *Mariam* 同様に3つの立場を横断しているといつてよいが、その際には自発的な意思が機能している。すなわち、夫を陥れて処刑させることで Wife から Widow へと意図的に移行し、さらに再婚によって再び Wife となる目論見が劇中で完結している。Wife から Widow へと自発的に移行するというのはそのまま夫の死を画策することであり、これは明らかに妻であるということに付随する義務からの逸脱であるが、この中で Salome はあえて、自らをのしられる立場において夫から Whore 扱いを受けるように仕向けている。したがって、Wife → Whore → Widow → Wife というように3回に渡って変容を続ける Salome のアイデンティティーはそのまま、男性によって規定される女性の地位というものを形骸化する力を持っているといえる。すなわち、あえて男性に自らを規定させ、制限させるように仕向けて自分の望むあり方を勝ち得るということによって、男性は Salome に対するコントロールを失いむしろ逆に Salome によってコントロールされる。これは *Othello* において Emilia が Iago に歯向かって彼のコントロールを離れる行動と一見類似しているようにも思われるが、しかし Salome の場合は抑圧を受けずに行動している。逸脱者でありながら懲罰を免れているのは、Salome が罰を下す側と一体化しており、しばしば *Mariam* に対して非難を向けることで自らの逸脱を隠蔽しているからであり、その際に、逆に Salome は抑圧者として機能している。これは Emilia と Bianca との関係との相似にも思われるが、ここで *Mariam* のセクシャリティを非難することによって Salome のセクシャリティは男性に近いものとなるので女性としての権限からの逸脱の罪が軽減され、Salome は男性の権限を超越することになる¹⁰。Emilia は先に述べたように定められた規範を脱構築して権利を獲得しようとしているが、Salome はその規範自体を破壊することにためらいがなく、男性中心社会自体を揺るがす存在であるといえる。したがって、Salome は自ら女性としての様相を移行してはいるが、ジェンダールールから逸脱しているのではなく、もはやその規範自体を意図的に破壊しようとしている点において、規範を作っている男性と同列に位置し、あるいは男性を圧倒しようとしているのでもはや規範による懲罰の対象とはなりえないのである。

The Tragedy of Mariam にはメインプロットに関与せず、かつ Male Fantasy をみたとするような、Salome と Herod の兄弟、Pheroras の恋人である Graphina が登場する。Graphina は身分が低いにもかかわらず、口数

の少ない従順な女性として描かれており、結果的には身分違いの恋を成就させて Pheroras と結ばれる。「書く」という言葉から派生するその名前が示すように Graphina は書き手によって記述される対象であり、自ら行動を起こすのではない、Male Fantasy の上で構築された理想的な女性である。したがって、何の懲罰も受けずにむしろ女性としては低い身分から身分の高い男性の Wife という地位に男性の力によって引きあげられるのである。この男性依存の果ての賞与は先にあげた Mariam や Salome のケースとは正反対であって、Othello における Bianca 同様に男性によって定められた女性の階層社会の内部で満足している女性は罰せられることはないというルールを示す役割である。また、Herod の前妻である Doris は離縁された後、Herod ではなく Mariam を憎悪の対象として選んでののしっており、これも男性の決めた身分規制に甘んじる女性は男性に反抗するよりも女性同士で攻撃しあうという Emilia と Bianca のパターンに類似している。したがって、この作品においても女性の身分は男性によって規定され操作されるという規則は厳然として存在しており、そこからの逸脱者は罰を受けるという点は Othello と共通している。ただし、特徴的なのは Salome の存在であり、性規範のルールを根底から転覆させるためには、男性と同列、あるいは男性と一体化して他の女性を攻撃することによってのみその束縛を逃れてあらたな枠組みを構築しようという行動をとることが出来るという可能性を提示している点であるといえる。

3. 結

夫の嫉妬に起因する妻の殺害という共通するメインプロットをもち、創作年代も前後している 2 戯曲では、女性を抑圧する社会的システムが複数の女性キャラクターの存在によって露呈させられている。特に男性の視点から、Maid、Wife、Whore、Widow などというような身分を規定することが男性中心社会が構築される上で重要であり、その境界線を女性が自らの力で乗り越えて状態移行を望むことはそのまま社会的な規範からの逸脱と認定されて懲罰の対象となる。この 2 作品におけるキャラクター上での最大の差異は陰謀のプロットを巡らすキャラクターのジェンダーである。Cary 作品における Salome は悪女である以上に、自身の正当性を主張する能力に長けており、既存のジェンダー規範を形骸化し、新たな秩序を生み出そうとする点において特異な存在であるといっていよう。Salome は男女の不公平に意義を申し立てる闘士としての側面からも描かれており、創作年代当時において進歩的であった作者と重なる部分も多いに指摘することができる。このように女性が置かれていた状況に対する疑問を、悪役を通してという控え目な手法によってであるとはいえ、女性作家である Cary が提示している点を考慮すると、これら 2 作品における最大の相違点は既存の性概念に対する作者自身のスタンス、ひいては作者のジェンダーに尽きるといえる。

嫉妬による殺害という古典的なモチーフをめぐるこの二つの戯曲において、ヒロインの死は全く対照的である。夫を責めずに非を負って死んでいく Desdemona と、劇中では語られない殉教譚としての Mariam の差異に作者の視点が伺える。

Desdemona は規範に回収されるが、Mariam の死は使者と Herod による男性の語りによっては記述し得ず、これは Cary による Mariam の規範からの解放とも考えられる。この二つの無実の死は逆説的に責めを負うべき存在を浮かび上がらせている。つまり逸脱する女性たちではなく、むしろ逸脱を規定する規範の存在である。

注

¹ Herbermann, Chapter 8 'The Slandered Heroine'.

² *Othello* 3 幕 3 場。

³ *Othello* 4 幕 3 場。

⁴ *Othello* 5 幕 2 場。

⁵ ピューリタンの教派の中には「夫の命令が神の教えに背く場合、あついは夫が敬虔なクリスチャンではない場合は、妻は夫に従う義務はなく、夫のもとを去ることも許されると教えた」(楠 246) ものもあった。

⁶ Greene, Gayle. “‘Tis That You Call Love”: Sexual and Social Tragedy in *Othello*’では Bianca と Desdemona の類似点が指摘されている。

⁷ *Othello* 4 幕 1 場。

⁸ Steven Greenblatt の *Renaissance Self-Fashioning: From More to Shakespeare* の中で Iago は即興演技を行う演出家能力を持つ人物であると記述されている。

⁹ Salome は新たな恋人との再婚をのぞみ、現在の夫と離婚すべく、夫側から離縁の申し立てさせようとあえて夫を挑発する。当時のユダヤ社会では妻の側から離婚を申し入れることは不可能であった。

¹⁰ 顕著にあらわれているのが、Salome が自発的に離婚をもくろみ、custom breaker になりたいと宣言する独白部分である。

Why should such privilege to men be given?
Or given to them, why barred from women then?
Are men than we in greater grace with heaven?
Or cannot women hate as well as men?
I'll be the custom-breaker and begin
To show my sex the way to freedom's door. (2.4.45-50)

参考文献

- Callahan, Dymnna. 'Re-Reading Elizabeth Cary's *The Tragedy of Mariam. The Fair Queene of Jewry*.' *Women, 'Race', and Writing in the Early Modern Period*. Ed. Margo Hendricks and Patricia Parker, NY: Routledge, 1994.
- Cary, Elizabeth. *Elizabeth Cary Lady Falkland Life and Letters*. Ed. Heather Wolfe. Arizona: RTM Publications, 2001.
- . *Tragedy of Mariam: The Fair Queen of Jewry*. Ed. Stephanie Hodgson Wright. Toronto: Broadview Press, 2000.
- . *The Tragedy of Mariam the Fair Queen of Jewry: With the Lady Falkland: Her Life*. Ed. Barry Weller, and Margaret W. Ferguson. Berkeley: California UP, 1994.
- Greenblatt, Stephen. *Renaissance Self-Fashioning: From More to Shakespeare*. Chicago: Chicago UP, 2005.
- Greene, Gayle. “‘Tis That You Call Love”: Sexual and Social Tragedy in *Othello*’. *Shakespeare and Gender: A History*. Ed. Deborah E. Barker and Ivo Kamps. London: Verso, 1995.
- Habermann, Ina. *Staging Slander and Gender in Early Modern England*. Aldershot: Ashgate, 2003.
- Neely, Carol Thomas. 'Women and Men in *Othello*: What should such a fool / Do with so good a woman?'. *The Woman's Part: Feminism Criticism of Shakespeare*. Ed. Carolyn Ruth Swift Lenz, Gayle Greene and Carol Thomas Neely, Urbana: Illinois UP, 1980.
- Shakespeare, William. *Othello, the Moor of Venice*. Ed. Michael Neill, NY: Oxford UP, 2006.
- Shakespeare, William and Cary, Elizabeth. *The Tragedy of Othello, the Moor of Venice and The Tragedy of Mariam, The Fair Queen of Jewry*. Ed. Clare Carroll. NY: Longman, 2003.
- Valbuena, Olga L. *Subjects to the King's Divorce*. Indiana: Indiana UP, 2003.
- 楠明子『英国ルネサンスの女たち』東京、みすず書房、1999 年。